

京都外国語大学ラテンアメリカ研究所・京都外国語大学ブラジルポルトガル語学科 主催

後援：駐日ブラジル大使館

第 22 回ラテンアメリカ研究講座

「ブラジルの人種・エスニシティとジェンダー

ーより公正な社会の実現に向けてー

日時：2022 年 12 月 17 日（土）13 時～16 時

場所：京都外国語大学 452 教室（対面形式）並びに Zoom によるオンライン形式

<講座案内>

1500 年にポルトガルがブラジルを「発見」して以来、ポルトガルの植民地であったブラジルが独立したのは 1822 年のことで、今年 2022 年は独立 200 周年に当たる。ブラジルは、豊かな天然資源ならびに人的資源を有している。世界経済において、農業・鉱業を中心に様々な分野で、すでに大きな存在感を誇示しているものの、そのポテンシャルを考慮すれば、能力を十分に発揮しているとは言い難い。とはいえ、今後、ブラジルの重要性はますます大きくなっていくことは間違いない。

これまでも、日本とブラジルの関係の重要性は、財界を中心に多くの人々により共有されてきた。ブラジルに渡った日本人移民とその子孫の活躍、1990 年の入管法改正を機にした日系ブラジル人の日本への還流現象など人的なつながりも豊かである。

ブラジルと日本の二国間関係は、今後ますます重要になっていく。本研究講座では、ブラジルの正しい理解のために、その多様性と歴史ならびに現在の社会情勢に目を向け、複合的な視点を提示する。

<趣旨>

すでに大国であるブラジルであるが、その潜在力を考えれば、今だ「未来の大国」たる地位を脱却していない。発展を阻害する理由の一つが、人種やジェンダーにおける「格差」である。その意味において、ブラジルにおいて「公正さ」が確立すれば、ブラジルのさらなる発展につながることは衆目の一致するところである。

本研究講座では、そのような人種・ジェンダーの問題に、ブラジルの多様性のもう一つの側面であるエスニシティを加えて、複合的にこの問題に迫る。

基調講演では、サンパウロ大学哲学・文学・人文学部東洋文学科日本学部門教授のレイコ・マツバラ・モラレス氏が、ブラジルにおける「日系人の歩み」にジェンダーの視点を加えた考察を提示する。

これに続く発表では、本研究所研究員の伊藤秋仁が人種とジェンダーにおいて二つのスティグマに晒されるアフリカ系女性の貧困の問題を扱う。本研究所客員研究員の住田育法は歴史的な視点からアフリカ系の女性でありながらブラジル社会で活躍した女性の生涯に焦点を当てる。同客員研究員の渡会環は「白人性」をキーワードに人種とエスニシティに関する考察を行う。神田外語大学の奥田若菜は人工中絶論争を事例に女性の権利運動の展開と現状について発表する。

最後のパネルディスカッションでは、フロア、オンラインの参加者、基調講演者ならびに発表者による議論を通じて、本テーマについての理解や考察を深める。



<プログラム>

開会の挨拶 (13:00)

基調講演 (13:05-13:55)

- モラレス・マツバラ・レイコ (サンパウロ大学)
「ブラジルの日本語教育に日系女性史を読む」

発表 (14:00-15:20)

- 伊藤秋仁 (京都外国語大学)
「貧困層の女性を取り巻く世界 —ブラジル女性刑務所の事例から—」
- 住田育法 (京都外国語大学名誉教授)
「社会的包摂を目指したアフロ女性シキーニャ・ゴンザーガの戦い」
- 渡会環 (愛知県立大学)
「ブラジル日系社会の『メスティサ』と日本の『ハーフ』がパフォーマンスする『白人性』—ジェンダーを通じてトランスナショナルに構築される『人種』—」
- 奥田若菜 (神田外語大学)
「人工中絶論争と社会階層 —『女性の声』は誰が代表しうるか—」

休憩 (15:20-15:30)

パネルディスカッション (15:30-16:00)

- コーディネーター フェリッペ・モッタ (京都外国語大学)
「より公正な社会の実現に向けて —ブラジルの人種・エスニシティとジェンダーの展望と未来—」

閉会の挨拶 (16:00)